

海・川・湖その世界とのふれあい

マリンスノー MARINE SNOW

No. 18
1997. 3. 22



● 目次

青森県でみられたトドとキタオットセイ	1	トピックス	4
影像シアターのご案内	2	催し物	5
「明治版展示水族収集広告文」のこと	3	浅虫の海の生物たち(18)	6
フェリー埠頭へ迷い込んだクジラ	3	浅虫水族館日誌抄録	6
		動物紳士録	7

青森県でみられたトドとキタオットセイ

櫛引 俊彦

昨年5月下旬、陸奥湾で“海獣騒動”がありました。“海獣”とはクジラやイルカ、トドやアザラシ、ラッコなどの海に住む哺乳類のことです。騒ぎは、海獣が操業中の漁船に上がって昼寝をしていたというもので、その正体は体長2m程の若いトドでした。トドは、日本近海では千島列島北部やサハリンに繁殖地があり、北海道沿岸に回遊してきます。騒ぎの主のトドは、回遊中に陸奥湾へ入り込んだのでしょうか。6月下旬頃には姿がみえなくなり、騒ぎはおさまりました。

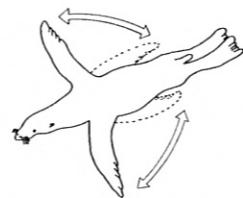
また、12月には八戸市の新井田川河口で、キタオットセイが保護されました。キタオットセイは、ペーリング海の島や、日本近海では千島列島北部、サハリン南部の島などに繁殖地があり、三陸沖や銚子沖へも回遊してきます。保護されたキタオットセイはケガもなく元気なようで、翌日には海へ放されたそうです。

今回みられたトドやキタオットセイのように、4本のあしがヒレのような形をしている海獣は、鰭脚（キキャク）類という仲間に分けられ、アシカ科、アザラシ科、セイウチ科の3科があります。アシカ科には、トドやキタオットセイ、当館で飼育しているカルフォルニアアシカなど14種がいます。アザラシ科には、日本の沿岸に姿をみせるゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、クラカケアザラシ、アゴヒゲアザラシや北海道東部の沿岸に生息するゼニガタアザラシなど19種がいます。セイウチ科は、北極海の沿岸海域に生息するセイウチ1種のみです。これまで青森県沿岸でみられた鰭脚類は、アシカ科ではトドとキタオットセイの2種、アザラシ科ではゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、クラカケアザラシの3種でした。

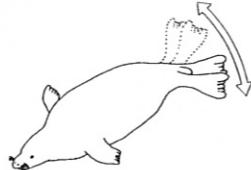
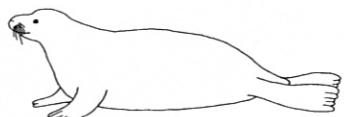
ときおり、水族館に“アシカ”的目撃情報が寄せられます。しかし、以前日本近海に生息していたニホンアシカは絶滅したといわれており、トドかキタオットセイ、またはアザラシの見間違いです。これらは、よく似ているところがあるので間違えられるのでしょうか。そこで、見分け方を簡単に紹介します。

まず、トドとキタオットセイの含まれるアシカ科とアザラシ科の見分け方です。アシカ科は外耳があり、後あしを前に曲げることができます。陸上では4本のあしで移動し、水中ではオールのような前あしを使って泳ぎます。これに対して、アザラシ科は外耳がなく、後あしを前に曲げることができません。陸上では前あしを使ってイモムシのようにはって移動し、水中では後あしを左右に動かして泳ぎます。このように、アシカ科とアザラシ科には外見上の明らかな違いがあります。

アシカ科



アザラシ科



アシカ科とアザラシ科の体型と泳ぎ方

次に、トドとキタオットセイの見分け方です。どちらもオスの方が大きく、毛皮で体がおおわれ、外見上は似た形をしています。しかし、体の大きさ、体色、顔つきなどの違いで見分けることができます。トドは、アシカ科で最も大きく、オスの成獣は体長3m、体重1,000kg程にもなります。毛の色は年齢、性別、毛の状態で異なることがあります、体が乾いていると黄色味がかかった茶色をしています。鼻先は太く、イヌのように長くなっ

ています。これに対して、キタオットセイの成獣は大きな個体でも体長2m、体重300kg程にしかなりません。毛の色は濡れているとまっ黒ですが、乾くと茶色味をおびてきます。鼻先は短く、とがっています。また、キタオットセイはアシカ科の中で、体のわりに後あしが特に長いので、見分けるときに役立ちます。



トド

さて、トドとキタオットセイについて紹介してきましたが、当館において、アシカ科ではカルフォルニアアシカ、アザラシ科ではゴマフアザラシを飼育しています。ご来館の際に、よく観察してみてはいかがでしょうか。



キタオットセイ
(デーリー東北新聞社提供)

映像シアターのご案内

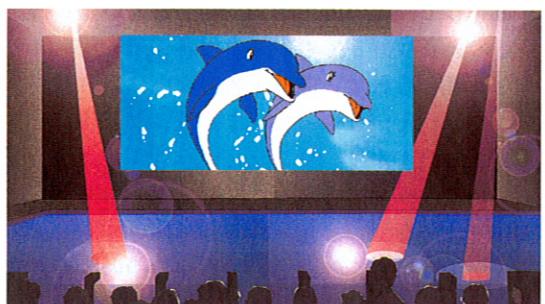
浅虫水族館では、平成9年のゴールデンウィークを目標に、映像や音響を強化してショーアップしたイルカショーや映像ソフトの映写を行う「映像シアター（仮称）」の工事が、平成9年2月から始まっています。「映像シアター（仮称）」では、4台のビデオプロジェクターを使い、ステージ奥の380インチ張り込みスクリーンに映像を映し出すことにより、映像をバックに使った演出が可能になります。従来のイメージを一新するようなイルカショー、例えば、大空をバックにイルカがジャンプしたり、イルカの可愛らしい表情をアップにしたりと、屋内型のショーポールでは表現しにくかった壮大なイメージのショーをお見せできるようになるのです。また、イルカショーとは別に、ショーの合間に映像ソフト単体での映写も予定しています。

現在予定している映像ソフトは「マリンアドベンチャー：イルカ号の大冒険（仮称）」です。ストーリーは『浅虫水族館を訪れた子供二人がイルカと遭遇し、イルカの案内で夢の世界へタイムスリ

ップ。友達になったイルカが未来の高速潜水艇「イルカ号」に変身し、子供達は海の世界のさまざまな生き物と出会い、新しい発見をしていく』という具合です。

今はまだストーリーを練っている段階なので、若干の変更があった場合はご了承願います。もっと別のストーリー展開になるかも知れません。いずれにしても、この大スクリーンを使った新イルカショーと映像ソフトの映写が、浅虫水族館の目玉商品になることは間違いないでしょう。ぜひ一度ご覧ください。

（佐藤 康也）



「明治版展示水族収集廣告文」のこと

過日、大日本水産会（東京都）の資料室に立ち寄ったが、書棚には明治25年2月16日を初版とする毎月1回発行の大日本水産会報が並んでいた。

手にとってパラパラとめくっていると、水族館の3文字が目に飛び込んできた。「アレッ」と思つてよく見ると、明治37年1月10日発行の第257号で、次の廣告文であった。（以下原文のまま）

○東京水族館廣告○

○本館は多數の水産生物を聚集飼養して其天然生活の状態を實見せしめ娛樂の間水産事業の啓發に大なる利益を與ふる特種の博覧場なり
本館は時々水族を交換放養する為の弘

○海獸類 ○爬蟲類 ○魚類 ○海藻類
其他總て水中に生活するものにして珍奇華麗なるものは勿論體軀の強大なるもの等相當代價を以て購入したし右御持合せあり又は捕獲せられたる方は本館支配人細谷醒三へ御申越を請ふ

東京淺草公園 株式会社東京水族館

（電話下谷七〇三番）
(電信略號ス イ)

水族館における展示水族の収集については買取り、寄贈、捕獲の三つの方法があり、これは国内、国外とも共通だが、現在のように動物園のマーケットもなく、情報通信が未発達の明治期、「浅草公園東京水族館」の支配人の展示物確保への苦労が文面に滲み出でて面白い。

しかし、海藻類とは脱帽である。水中に繁茂する海藻類の採取、運搬には現代のモータリーゼーション時代でも苦勞が多い。珍奇華麗な水中植物も特に夏期には変色が早くかつ水槽に移植しても活着への技術は一般的には昨今でも難度が高いものとなっている。

細谷支配人も、相当代価の算求に、頭を悩ませたのではなかろうかと推察する次第である。

（青森県水産部長佐藤立治 平成6～7年浅虫水族館館長）

フェリー埠頭へ迷いこんだクジラ

1996年8月2日夜の11時頃、眠っている私の耳元で電話のベルが鳴り響きました。こんな時間に何がおきたのかと受話器を取ると、「青森市新田のフェリー埠頭にクジラが迷い込んでいるのですが来てほしい」との連絡でした。そこで、他のイルカの係員も呼び出し、ウェットスーツなどを用意して現場へ向うことになりました。

現地についたのは、8月3日午前1時過ぎでしたが、このフェリー埠頭は青森と北海道を結ぶフェリーの発着場ということもあって、深夜にもかかわらず乗客などが大勢集まっていました。クジラは皆が見守る中、時折『ブшу』という音の呼吸をして、岸の方を向いて浮かんでいました。

このまま放置しても本来の生息場所へ戻っていくとは考えられず、係員4名が海中に入り救出作業をやろうという事になりました。クジラは、体長約4mのオオギハクジラという種類で、大分弱っているようであまり暴れませんでした。そこで、胸ビレなどをつかまえて沖の方に向けてやったのですが、しばらくの間泳いで行くもののすぐに岸の方へ戻ってきています。しかし、何度か同

じ動作を繰り返し行なうと、沖の方へ向って行き姿が見えなくなりました。



このまま無事に仲間の元へ戻ってほしいと願い、係員一同現場を後にしました。

しかし、8月5日に同じフェリー埠頭に死亡したクジラが漂着したという連絡が入り、確認を行ったところ、先日救出作業をしたオオギハクジラのようでした。弱った体ではどうしようもなかったと考えられます。今後、鯨類の迷入などがありましたら、今回の事を参考にして、今度はぜひ救ってあげたいと思います。

最後に、お忙しい中連絡をくださった青森市フェリー埠頭の職員の方々へ深くお礼を申し上げます。

（永田 光浩）

●トピックス

「第22回海獣技術者研究会」開催

平成8年11月20日、日本動物園水族館協会主催「第22回海獣技術者研究会」が、当館の担当で青森市内のホテルを会場にして開催されました。

この研究会は、動物園や水族館の海獣類（イルカやアシカ、アザラシ、ラッコなど海に棲む哺乳類）やペンギン類などの飼育担当者が集まり、毎年1回国内の園館が持ち回りで行っているもので、今回が22回目となります。

研究会前日には、航空会社のストライキがあつたほか、小雪がちらつくなど、参加者の足に影響ができるのではないかと心配しましたが、北は北海道から南は九州・沖縄までの全国の動物園・水族

館の46園館と日動水協会事務局および会友などの74名の参加者全員が無事出席することができました。



研究会では、飼育・展示・フィールド調査、病理等の研究成果14題が発表され、活発な質疑や意見が交されました。終了後には、各園館の担当者が互いに情報交換をするなどして親交を深め、盛況裡に終えることができました。
(阿部)

繁殖賞受賞!! ホッキョクダラ

当館で飼育展示中のホッキョクダラの繁殖（詳しくはマリンスノーNO17参照）に対して、このたび(社)日本動物園水族館協会より「繁殖賞」が贈られました。

この賞は日本の多くの動物園と水族館が加盟している(社)日本動物園水族館協会が飼育技術の向上と自然保護を目的として、わが国で最初に繁殖し、さらに6ヵ月以上生存させることのできた園館に対して贈られるものです。

当館では1991年からホッキョクダラの飼育を開始し、92年、93年、94年と3年連続して自然産卵が見られ、その都度、卵を回収して育成を試みました。

しかし、いずれの年も仔魚の開口時、および動物プランクトンの切り替え時点で失敗してしました。



今回成功したポイントは、人工受精で卵をとったことと、エサの栄養強化がうまく行われたからだと思います。最後に、ご協力をいただいた県水産増殖センターの皆様に深く感謝いたします。

(神)

「ふれあい水族館」開催

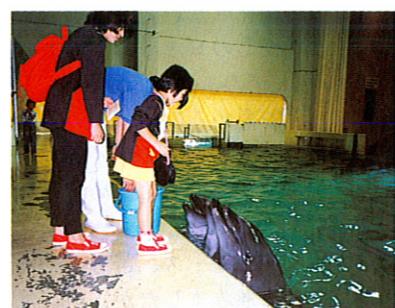
動物愛護週間にあわせて「ふれあい水族館」を9月21日から23日までの3日間開催しました。

これは、普段見ることのできない水槽の裏側を見学し、ショーピールでイルカと一緒に記念撮影した後、そのイルカに餌をあげてもらうという企画です。イルカとのふれあいは普段なかなかできないということもあって、参加いただいた皆様からは大変おもしろい体験ができたと感謝の言葉をいただきました。特に小さなお子さんは、間近に見るイルカの大きさにびっくりして近づけなかったり、うまくイルカの口の中に餌を入れられなかったりというハプニングもあり、普段できない貴

重な体験をしたのではないでしょうか。

この企画は、参加が無料ということもあって大変人気が高く、1回20名の定員にあつという間に達してしまう盛況ぶりでした。

今後も動物愛護精神を高めていけるよう、新しいアイディアを加えながら、お客様にもっと楽しんでいただけるよう努力していくたいと思っています。
(渡辺)



●催し物

「ワンダフル!! スモール・ワールド」

ゴールデンウィークの特別展として、小型で色鮮やかな魚たち50種1,073尾を集め、「ワンダフル!! スモール・ワールド」を4月27日から5月26日まで開催しました。

展示槽では、ルリスズメダイ、ミツボシクロスズメダイ、ヒレナガスズメダイなどのまるで宝石のような魚たちが、とても愛らしい姿で泳ぎ回り、御来館されたお客様をお迎えしました。

そのほかには、スマレナガハナダイをはじめとするハナダイの仲間、マリダリンフィッシュ、ネオンゴビー、キイロサンゴハゼなどのユーモラスでカラフルな魚たち、そして、グッピー、ネオン

テトラ、エンゼルフィッシュなどの淡水魚を展示しました。

多くのお客様が、このコーナーで足を止め、色とりどりの魚たちに見入っていました。どの魚たちもそれぞれに独特的な個性があり、お客様にも充分に楽しんでいただけたことと思います。これからもこのような展示を行ないたいと考えています。
(野澤)



「夏休み生物飼育教室」

最近のペットブームで、金魚や熱帯魚、両生類などを飼育している家庭や学校が多くなっています。しかし、基本的な飼育方法や病気の対処方法を知らないために、長生きさせることができないケースが多いようです。そこで、夏休みの特別展として「夏休み生物飼育教室」を7月28日から8月31日まで開催しました。

魚類、両生類、爬虫類、昆虫などいろいろな種類の生物を展示して解説パネルで詳しく飼育方法を説明するとともに、ろ過装置、空気を送るポンプ、水を温めるヒーター、餌、病気になった場合の薬など飼育に必要な器材一式を揃えて紹介しま

した。

また、子供たちに人気があり飼育方法について問い合わせの多いカメについては、夏と冬の飼育方法の違いなどを紹介しました。お客様の中には現在ペットを飼育しておられる方や興味を持たれている方も多いようで、展示や解説を熱心に見学されていました。
(金沢)



「ほたてのヨットレース」

水族館の新年は「ほたてのヨットレース」で幕を開けました。ホタテガイを泳がせて順位を競うこのユニークなレースは、「ホタテガイが泳ぐところを子供達に面白おかしく見せたい」という発想から生まれたものです。模型のヨットにホタテガイをつけ、天敵であるヒトデのエキスを垂らし、ホタテが逃げる力でヨットを進めるのですが、最大の難関はヨットの製作でした。ホタテガイは前後左右どの方向にも泳ぎます。真っすぐ進めるために、様々な改良を加え、試行錯誤を繰り返しました。

期待と不安が交錯する第一レース、苦労の甲斐あってヨットは概ね順調に進みましたが、中には

応援の声をよそに途中でバックするものもあり、会場は歓声に包まれました。

当初子供達を対象に考えたレースでしたが、むしろ大人の関心の方が高く、レース終了後もその場に残って水槽を覗き込んだり、実際にヨットを進めてみたりと興味津々の様子でした。
(伊藤)



～浅虫の海の動物たち～

(18) ムツサンゴ

Phizopsammia minuta mutsuensis

ムツサンゴは、刺胞動物門、花虫綱、石サンゴ目、キサンゴ科に属するサンゴで、1932年に青森県の「むつ湾」で初めて発見されました。「むつ」という青森県の地名の付いた数少ない海の生物の一つです。

若狭湾以北の本州日本海沿岸、陸奥湾、石狩湾、伊豆半島周辺などに生育する北方種で、共肉、触手とも鮮やかな黄色い色をした可憐なサンゴです。サンゴ体は直径3～5ミリ、高さ5～8ミリの単体で、触手の数は42～48本で昼夜ともに開いています。薄い根のような走根を伸ばし、その先端から芽生し、新しいサンゴ体を形成していきます。また、浅虫では8月中旬から9月上旬にかけてプラヌラ（サンゴの幼生で泳ぐことができる）が観察されています。このような方法で、その数を増やしていきます。浅虫では、消波ブロックの内側のような入り組だ所や風波をさえぎるような岩陰に集中して生活しているようです。

展示水槽は、自然の状況に近づけるために、やや暗い照明にしています。しかし、鮮やかな黄色



い色をした、たくさんのムツサンゴのおかげで、まるで春の菜の花畠のような、とてもにぎやかな水槽になっています。お客様も思わず、「きれい」「かわいい」など言っては、この水槽に見入っています。

まだご覧になっていないあなた、一度足を運んでみませんか・・・
(野澤)

参考文献

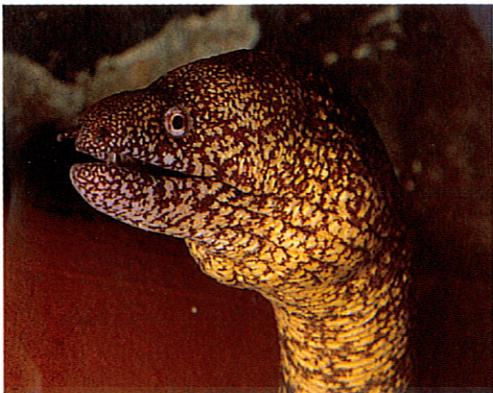
- 鈴木 克美 (1972) 海の生きもの海岸動物 34.
岡田 要 (1981) 新日本動物図鑑〔上〕 293.
西村 三郎 (1992) 日本海岸動物図鑑〔1〕 167.

浅虫水族館日誌抄録

- 1.28 佐井村牛滝よりダウリアチヨウザメ搬入
2.6 浅虫小学校生物教室
3.6 北海道大学臼尻実験所よりサケビクニン搬入
8 京急油壺マリンパークよりタカアシガニ搬入
19 ホッキョクグラ稚魚公開
28 フンボルトペンギン孵化
31 京急油壺マリンパークへケムシカジカ他搬出
4.17 大畠地方水産業改良普及所よりオオカミウオ他搬入
17 大間町奥戸よりババガレイ搬入
20 京急油壺マリンパークへホッケ他搬出
21 よみうりランド海水水族館へホッケ他搬出
27 春の特別展
「ワンドフル!! スモール・ワールド」開催 (～5/26)
5.13 マリンピア松島水族館へホッケ他搬出
22 よみうりランド海水水族館よりアカマツカサ他搬入
5.31 鰯ヶ沢漁協よりオオカミウオ搬入
6.6 和歌山県立自然博物館よりウミシダ搬入
15 大間町奥戸よりカスザメ搬入
7.5 下関水族館よりカブトガニ搬入
19 東通村白糠よりスルメイカ搬入
20 夏の特別展「夏休み生物飼育教室」開始 (～9/1)
24 室蘭水族館へマダイ他搬出
8.2 青森フェリー埠頭にクジラ迷入救出作業
9.21 動物愛護週間「ふれあいタイム」開催 (～23)
10.15 第11回浅虫水族館図画展開催 (～11/30)
28 フンボルトペンギン孵化
31 フンボルトペンギン孵化
11.12 室蘭水族館よりマダラ(稚魚)他搬入
20 第22回海獣技術者研究会開催
21 海獣技術者研究会施設見学
12.14 フンボルトペンギン孵化

浅虫水族館

動物紳士録



●ウツボ *Gymnothorax kidako*

サンゴ礁域を除く南日本に分布し、岩礁帯に生息しています。肉食性で、全長80cmになります。

体形はウナギに似ていて細長く、うろこのない柔軟な体で、いかにも気持ちの悪い体形をしていますが、ダイバーの手から餌を食べ、よく馴れるという一面もあります。しかし、モリで突き刺しても、なおも噛みついてくるというほどの猛魚でもあります。主に夜行性で、昼間は岩陰や岩穴に潜んでいます。

●オイカワ *Zacco platypus*

北陸・関東地方以西の本州、四国の瀬戸内側と九州の河川中・下流域や湖沼に分布するコイ科の淡水魚で、ヒゲはありません。雑食性で、全長は雄で15cm、雌で10cmになります。

雄は繁殖期になると、赤味を帯びた婚姻色になり尻ビレが大きくなります。雄と雌で形などが異なるため、違った名前で呼ぶ地方も多くあります。

近年は、琵琶湖産稚アユの移殖に伴ない、東北や四国の太平洋側にも分布域が広がっています。



●カブトガニ *Tachypleus tridentatus*

約2億年もの昔からその姿をほとんど変えずに生き残ってきたカブトガニは、まさに「生きた化石」そのものです。カニという名がついていますが、分類学上ではクモに近い仲間です。

瀬戸内海や九州北西部に分布し、主に沿岸の砂地でゴカイ類などを食べています。しかし、近年、埋め立てや海の汚染によりその数は減少しつつあり、岡山県金浦湾では、天然記念物になっています。



表紙説明 シモフリタナバタウオ *Calloptesiops altivelis*

西太平洋、インド洋、紅海に分布し、日本でもサンゴ礁域の崖の岩穴などに住み、肉食性で魚類や甲殻類を食べます。この魚は、岩穴などに隠れるとき、頭のほうを奥に入れ、尾ビレのほうを出しています。これは、ハナビラウツボに似せるための擬態だと考えられています。

マリンスノー No.18

1997年3月発行

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-35 青森市浅虫字馬場山1の25

☎0177-52-3377